

(一九五六年九月)

「人間詩話」吉川幸次郎 岩波 昭和32年刊

その四十九

梅堯臣

梅堯臣、字で呼ばば梅聖俞が、妻をなくしたのは、前にもふれたように、宋の仁宗の慶曆四年、一〇四四年、南方から大運河ぞいに汴京へ転任する舟旅の途中、江蘇省高郵県の舟がかりに於いてである。妻は友人謝希深の妹であり、最愛の妻であった。妻の死をいたんでの作、「悼亡三首」の、うちひとつにはいう、

従来有修短 従来り有るは修きと短きと

豈敢問蒼天 豈に敢えて蒼天に問わんや

長寿の人と短命の人とがこの世にあることは、今にはじまることでなく、むかしからのことであり、それは天の与える運命だとすれば、彼の女の早い死も、天のなせるわざなのである。いまさら、かの蒼蒼と神秘的な色をたたえる天にむかって、彼の女の早世の原因を問いただそうとは思わない。

しかし彼の女こそは、実に美しく、実に聰明であった。私が見かけたかぎりの人妻で、彼の女のごとく美しく聰明な婦人は、この世にいなかった。

見盡人間婦 人の間の婦を見尽くしたれど

無如美且賢 如くも美しく且つ賢れしは無かりき

あるいは人間の長命と短命とは、天の全然の恣意ではなく、かしこいものはかえって短命であり、おろかなものはかえって長命である、ということがあるのかも知れない。つまり彼の女も、あまりにも「美且つ賢」であったゆえに、長い命が与えられなかったのかも知れない。しかしそれならばそれで、もつと寿命を与えてくれとはいわぬ。せめて暫時、寿命を借してくることはなせできなかったのか。

譬令愚者壽 譬令 愚なる者は寿ながしとせば

何不假其年 何ゆえ其の年を假さざりし

彼の女こそは、いくつかの城にも匹敵する宝玉であった。それがよみのくにへと沈みゆくのを、私はじっとたえしのびつつ、見おくる。

忍此連城寶

此の連城の宝の

沈埋向九泉

九泉に向かいて沈み埋みゆくを忍ぶ

この詩 人間の婦を看尽するに、如くも美且つ賢なるは無し、どこの奥さんも、うちの女房ほどきれいでも利巧でもなかったと、大胆不敵な言葉をふくんでいる。自分の女房をほめることを、中国では、むかしからはじとしなかったが、それにしても大胆な言葉であり、大胆さが悲しみを深める。

「悼亡」のまた一首にはいう、

每出身如夢

そとに出ずる毎に身は夢の如く

逢人多強意

人に逢いては強いての意のみ多し

公務員である彼は、毎日外へ出る。しかし重心を失った世界は、夢のように手ごたえがなく、その中にわが身がいる。出さきでの人との応対も、うまくゆかない。強いてむりにとりつくろった気もちで、とんちんかんな応対をしている。

歸來仍寂寞

帰り来たれば寂寞たる仍にして

欲語向誰何

語らんと欲するも誰何にか向かわん

彼の女は二人の男の子と一人の女の子をのこして死んだが、まだみな小さい。話しあいてにはならない。

窓冷孤螢入

窓は冷かにして孤の螢のとび入り

宵長一雁過

宵は長くして一つの雁の過ぎゆく

借家のまどの下にいる四十三歳の大学の先生の姿を想像してほしい。なくなった妻は三十七であった。

世間無最苦

世間に最^{なほ}なる苦しみは無し

精爽此消磨

精^{せい}爽^{そう}の此に消磨す

精爽とはエネルギー、妻を失った悲しみのためにエネルギーの消耗してゆくのを感ずると、やはり率直にいつてはばからない。